

◎土佐清水市立中央公民館主催「大漁バラ抜き節教室」講話

11月30日(月)10時より、土佐清水市立中央公民館3階・多目的ホールにて「大漁バラ抜き節教室」(講師・中山信伎さん、安岡美紀さん)が開催された。

生涯学習課市史編さん室は、その基調講演を依頼され、室長田村が「鼻前浦々に響くバラ抜き節の声」との演題で約40分間の講話をさせていただいた。

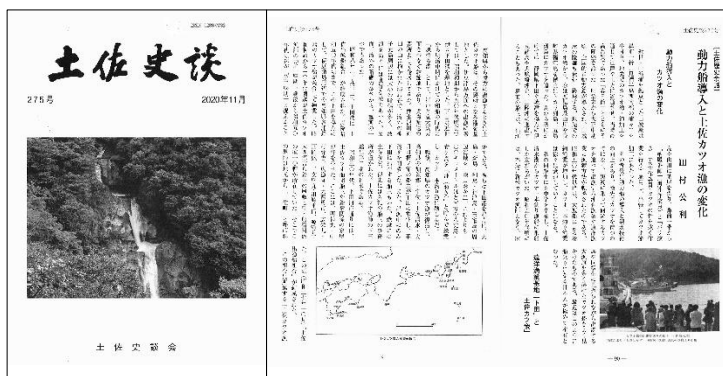
講話では、近世の中浜浦の様子、中浜を本拠としたカツオ節廻船商人山城屋の隆盛、大正から昭和にかけての動力船導入と遠洋漁業への転換、バラ抜きと節づくりなどについてその概要をざっくりと話をさせていただいた。一昔前の漁村女性唯一の就労である「バラ抜き(カツオ煮節の骨抜き)」。釜出しされた煮節が冷めるとバラ抜きが始まる。彼女らは、中骨(節の真中にある骨7~8本)、腹骨(20本ほど)を手早くバラ抜きする。骨に付いた魚肉をこそげ取り、搗り潰して「もみ」を作る。この「もみ」はバラ抜きした後の小さな割れ目を補正するための補正材となる。この「バラ抜き」や「節づくり」は、近世から連綿と受け継がれてきた地域の伝統であり、誇りである。

このとき唄われた「バラ抜き節」は、鼻前に生きた母の哀愁唄であり、労働の作業唄であり、生活の唄である。いわば先人たちから受け継がれてきた魂の唄でもある。この文化伝統を絶やすことなく、私たちは次代へと受け継いでいかなければならない。



「動力船導入と土佐カツオ漁の変化」と題して

「土佐史談 275号」の土佐歴史余話に投稿しました。



←『土佐史談 275号』の「土佐歴史余話」というコーナーに投稿しました。大正から昭和にかけてのカツオ漁の動向を詳しく書いています。神津島近海で昭和25年に遭難した琵琶丸のことも少し触れています。興味がある方は是非ご購入ください。若干の抜き刷りを土佐清水市立市民図書館に置いてあります。

中世・石造物調査からの一コマ・・・



↑松尾沖台にある奥州遍路墓

↑加久見泉慶院の石仏まるで

↑下ノ加江・小方の圓通院境内

帽子をかぶっているかのような。に所在する石仏

幕末期の奥州出身者の遍路墓。随分遠くから遍路の旅路に来たものだ。土佐で生涯を終えた遍路さんの人生を思う。市内に点在する中世石仏の表情は癒される。また、その豊かな表情は微笑ましくもある。

新たに誕生した土佐清水市の指定文化財「近世～近代自然災害碑群」

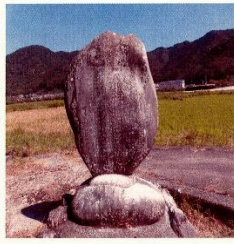
土佐清水市ジオパーク推進協議会・危機管理課・生涯学習課が土佐清水市郷土史同好会や自然史研究会と共同調査した結果を9月の市定例教育委員会に提出。その後、市文化財審議会へ諮問があり、10月に市文化財審議会で答申が出された。この答申を11月の市定例教育委員会にて検討した結果、下記の(1)～(10)の10ヶ所の自然災害碑が、新たに市文化財として登録された。赤字が近世の石造物、紺色が近代の石造物である。

- (1)五味天満宮地震碑(下ノ加江)
- (2)五味天満宮天災記念碑(下ノ加江)
- (3)下ノ加江水害記念碑(下ノ加江)
- (4)下ノ加江洪水記念碑(下ノ加江)
- (5)下ノ加江復旧記念碑(下ノ加江)
- (6)中浜池家墓碑(中浜)
- (7)中浜恵比寿神社地震碑(中浜)
- (8)三崎十字橋碑(三崎)
- (9)三崎堤防復旧記念碑(三崎)
- (10)下川口郷災害記念碑(下川口)



下ノ加江・長野に所在する水害記念碑↑

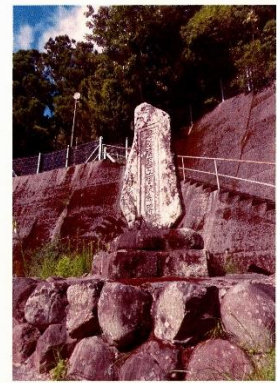
※(1)(6)(7)(8)は江戸時代に発生した安政地震における地震津波碑、(2)(3)(4)(5)(9)(10)は大正9年の市域全域を襲った水害における復旧碑である。(1)(6)(7)(8)では、安政地震の経験を踏まえて、地震の特徴を端的に述べ、日頃からの備えや注意点などを分かりやすく石碑に刻んでいる。(2)(3)(4)(5)(9)(10)では、大正9年の豪雨・洪水の凄まじい惨状を記載し、地域住民が災害に負けず、一致団結して普及・復興していったことが刻まれている。これらの自然災害碑には、郷土に生きた先人たちが後世の私たちに向けて注意喚起を行った、まさに「命のメッセージ」である。



(1)五味天満宮地震碑 (2)五味天満宮天災記念碑 (3)下ノ加江水害記念碑 (長野)



(8)三崎十字端碑



(9)三崎堤防復旧記念碑



(4)下ノ加江洪水記念碑



(5)下ノ加江復旧記念碑



(6)清水中浜池家墓碑



(7)清水中浜恵比寿神社地震碑



(10)下川口郷災害記念碑

「市史執筆のブレイクタイム(14)」

中浜万次郎の好物「ウナギ茶漬け」

市史編集委員長 田村 公利

私が初めてウナギの蒲焼を食べたのは、昭和40年代・小学校低学年の頃のことである。栄町通りにあったウナギ屋である。母方の祖父が丁度栄町にあった松谷病院へ入院しており、母とともにその見舞いに行った帰りに食べた。世の中にこんな旨いものがあるのかと自分の中ではかなり衝撃的であった。

万次郎の同郷の友人である池道之助の日記文『思出草』に、万次郎が高知市内に居住していた頃、「ウナギ茶漬け」なるものを食べた記事がある。ウナギがかなり好物だったと思われる。鎌倉・長谷の「浅羽屋」、東京・浅草の「やっこ」などのウナギ屋に出没し、ウナギ料理をよく食べていたようだ。足摺岬在住・遠近菊男氏（元土佐清水市議会議員）の著書『漂客談奇に学ぶ 漁人万次郎』（みさき智亮院）には、浅草のウナギ店「やっこ」を遠近氏自らが訪問し、現在も連綿と暖簾が守られていることが記されている。この店には、勝海舟・武市半平太なども度々訪れていたと伝えられる。

万次郎は、蒲焼の甘辛い味を好んだ。万次郎は老後に長女寿々（すず）と長く暮らしていた。その寿々によると、万次郎は酒を飲まないかわりに甘いものが大好きだったという。中浜家に伝わる料理として「浜煮」があった。大きな鍋にマグロのトロの切り身を入れ、ネギを長くぶつ切りにして砂糖醤油でグツグツ煮る。万次郎はこれを旨い旨いと食べていた。トロのかわりに牛肉を入れることもあった。これは今でいう「すき焼き」である。「浜煮」の「浜」は、中浜の「浜」を取ったものである。また、正月の雑煮は、鴨肉の出汁で取ったものでコクがあり、朱塗りの鶴の蒔絵のある大きな椀で正月を祝っていた。これによりかなりの甘党だったことが分かる。

引用・参考文献：中浜博『中濱万次郎―「アメリカを初めて伝えた日本人」―』富山房、2010年。

庭の柚子が黄色く色づき始めました。これからが冬本番、寒さが増してくるよう思います。編集委員各位には、コロナ禍でもあり、お身体にはくれぐれもご自愛ください。